
はんもん小説

にごり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はんもん小説

【NZコード】

N4346M

【作者名】

にじり

【あらすじ】

はんもん、スノーの回想

ピンク・エターナル・クリスタル

「どうかした、スノー？」

「ご主人様に呼びかけられて、僕は顔をあげた。
「な、なんでもありません」

ご主人様は心配そうな顔をしていた。

僕の思っていたことが、顔に出てたのかな

「さびしそうだつたけど」

「いえ…。少し、昨年のこと思い出していました」

昨年の初冬。それは、僕があの子と出会つてから間もないときだ
つた。

「今日はどこへ行かれるんですか？」

お出かけが好きだつた僕は、「ご主人様にそう訊いた。

「ご主人様はにつと笑つて、

「マイピクさんとこにね」

と言つた。

今日はいつたいどんなマイピクさんの家に行くんだらう
そんなことを思う。

大抵、ご主人様が「マイピクさん」というときは、僕の知らない
人のところへ行く。知り合いの人のところなら、名前で呼称するか
ら。

その人のところは結構遠い場所にあつた。

「ここにちは」

ご主人様は少し大きな声でそう言つた。

少ししてから出てきたのは、女性だつた。

「いらっしゃい」

笑顔でご主人様と僕を受け入れてくれた。肩にはこの方のはんも

んらしき方が乗つかつてゐる。

「こんにちは、僕、Snooとります」

「Jnにまひせ、自分はSnooefeuと申します。スノー様ですね、よろしくお願ひいたします」

丁寧な口調で、さうてお辞儀までしてくれた。

あ、丁寧にありがとうございます。Jnよりよろしくお願ひいたします

そう言おうと思つたら、スパイトフルさんはお辞儀した姿勢のまま肩から落ちてしまふ。スパイトフルさんのJn主人様がすぐにキヤツチした。

Jn主人様同士がしゃべつている最中、僕はJnのはんもんたちと会話をしていた。そしてそんな中で田に留まつたのが

「スノーつていうんやな。しろすけつて呼んでもええか?」

片眼を包帯で覆つた女の子のはんもんだった。

「あ、はい、いいですけれど…」

最初、どきつとしたけれど、かなりフレンドリーな対応で僕は次第に打ち解けて行つた。

彼女の名前はノーノさんといつらしい。

彼女との他愛もない話を続けてゐるさなか、唐突にノーノさんは田を見開いて僕に突進してきた。

「うわつ！」

なにするんですかっ！？

そう続けるつもりだつたのだけど。

「なんや、これ！？ おもろいなあ！」

僕の翼をしきりに触つてくる。伝わつてくる、ノーノさんの手の感触。

どくん

何か聞こえたような気がした。

どくん どくん

僕の、胸からだつた。

どくん どくん どくん

次第に僕の顔が赤面していくのが分かつた。

ぐるぐるぐるぐる目が回る。

僕は何も言えずに、そのまま意識を失つた。

「大丈夫、スノー？」

目を開けると、そこには声をかけてくれるご主人様の姿があつた。

「どうかした？」

「……あの場所にいた……ノーノさんという方に、僕の翼を触られて……体が熱くなりました」

若干、僕の中で、僕が照れているというのが感覚で分かつた。

「そ、そ、う、だつたんだ。恋だね」

「恋……？」

驚きだつた。恋という言葉の意味は知つていたけど、僕にそんなときが訪れるなんて。

僕は、ご主人様に仕えるだけで終わる生涯だと思つてた。

僕にも、こんな感情があつたなんて。

「ぼ、僕は……本当に、あの子のことが好きなのでしょうか。単に女の子でしたから、恥ずかしかつただけなのでは、ないのでしょうか」「ちがうね。だって、女の子のはんもんだったら、他にも会つてる子はいるでしょ。一目ぼれじゃないかな」

「では……一目ぼれで成功した告白はあるのでしょうか」「！」

僕はいつたい何をご主人様に訊いているのだろうか。ご主人様だつて流石に驚いた顔をしている。

そう、僕はご主人様に仕えていればそれでいい。余計な煩惱は増やさないほうがいいんだ。

けれど、ご主人様の口から出た言葉は、僕の予想とは全く違つていた。

「あ、しろすけ！」

笑顔で手を振ってくれるノーノさん。

あれから、僕は自分が出来ることを考えてみた。

僕は、氷の力を持つてゐる

僕は、その氷の力にノーノさんに対する想いをこめて、永久の雪の結晶を作り出した。

今まで作つたことのある永久の雪の結晶とは違い、それは鮮やかな桃色に染まつていた。

それから、ノーノちゃんへの想いを取り扱つて作つてみると、いつも青色の澄んだ永久の雪の結晶ができた。

明らかなる、ノーノさんへの、恋の表れだった。

こんなものが出来上がつたときは、心底羞恥したけれど、もう恥ずかしさなんていい。

ご主人様だつて、言つてくれたんだから。

「スノーの人生はスノーのものだから、告白するかしないかは、スノーが決めるといいよ。その結果がどうなつたとしても、僕はスノーを怒つたりはしないから」

僕は、ノーノさんの目の前に立つた。といつより、ノーノさんが既に僕の前に立つていたのだけれど。

「ノ、ノーノさん…」

「なんや？」

笑つて応えた。僕の鼓動が早くなる。

「こ、これを…」

手が震える。おさえる。おさえる。おさえる。

「受け取つていただけませんか……？」

結局、手が震えるまま、桃色に染まつた永久の雪の結晶を渡すことになつた。

「これは…？」

「ぼ、僕の力で作つた…永久の雪の結晶…いうものです…。常温で

おこてあれば、絶対に融けることはあつません……。」

「そりなんか……冷たいなあ、これ」

ノーノさんは、結晶よりも、僕の手と顔を交互に見ていた。

「なにやつてんねん。手震えるぐりこむなるんやつたら、無理せんでもええのに」

そしてノーノさんは、とりあえず体にもうつた結晶をつなると、両手で僕の手を抱え込んだ。

どくん どくん どくん どくん どくん

また、鼓動が早くなる。緊張しているんだ。

「で、どないしたん?」

「あ、え……と……その……」

つまく口から言葉が発せられない。

一十秒ぐらい沈黙があつたかと思うと、

「ノ、ノーノ、さん!」

のどにつかえていた言葉を、思い切り吐き出した。

「つ、付き合つてくださいませんか! ひ、一田ぼれてしま、しまいました!」

さすがに、いきなりの言葉にノーノさんもきよとんとしていた。

そして、ふつと口角が上がつたかと思うと、

「ええで。うち、告白されたの初めてや。しらすけみたいなん、うちも好きやで」

ほとんど一方的で。

断られることを前提として。

自分の想いに嘘をつかずに。

相手に自分の気持ちを伝えた。

そして、ここに両想いの恋人ができた。

「やつか……しばらく向こうに行つてないから……」

「くじとうなづく」としか出来ない、僕。

「それじゃあ…」

「ご主人様の言葉に僕は顔を上げる。

「次の日曜日にでも、行こつか」

僕の顔は自然とぱあと明るくなつていた。

*

僕は、恋人ができたことによつて、ご主人様に仕える立場のくせに、
差し支えになつてしまつてゐるんぢやないかな。

それでも許してくれるご主人様には感謝してゐる。

でも、僕らはんもんはご主人様に仕えることが第一前提。

それをなおざりにして、恋人と会えないから、としょぼくれるのは、
間違つてゐるんぢやないかな？

*

僕は、これからも成長しないといけない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4346m/>

はんもん小説

2010年10月20日16時35分発行